

あらためて「開発とは」を論ずるまでもなく、歴史地理学が開発をとりあげたについては、当然それなりに理由があるはずであるが、それがなんであるかは、いちがいにいえそうもない。なぜならば、開発にたいする問題意識が人によってちがうのであるから。しかし地理学の場合には、開発が地域の形成過程を追究するテーマのひとつであることには疑念がない。であるからには、地域の拡大、構造の変化、地域概念の形成、など、究明の主眼がいずこにあるとも、開発という事象を通して地域形成のプロセスを求めようとする意図が描き出されなければならぬ。

本書には、農業・工業・集落・地域名称などの分野からのアプローチ、一〇編を収録することができた。時代的には中世・近世・産業革命期前後・現代にわたり、地域的には日本以外に中国二編が含まれる。土地利用や都市の開発を含めえなかつたのは残念であったが、網羅的に素材をならべても効果的でないと思われる。問題意識が人によって異なるのであれば、開発という課題にたいする各研究者の態度にも相当の幅があるのが現状であり、収録した論文をみても、開発にたいする各自のイメージとアプローチとは個々に形成されている。そしてこれはこれで結構だと思いが、論議の共通課題は研究対象の扱い方に統一的基盤を与える材料として提供されるのであろうから、その目

的のためには、なお時間と、研究者の意識的な研讃の積重ねが必要である。このような観点から、本書が今後の研究にとってひとつの礎石となるであろうことを確信するものである。

昭和四〇年七月

山口 恵一郎